

社会科学習指導案

平成18年10月27日（金曜日） 第5校時（13：30～14：20）

桐生市立昭和中学校 2年1組 美術室 指導者 松 島 照 欣

授業の視点

日本の近代化と産業革命が密接に関連していたことを理解させるために、身近な地域教材を活用し、多面的・多角的に考察させることは、歴史的な見方や考え方を育てるうえで有効であったか。

I 題 材 「まゆと鉄がささえた日本の近代」 （単元 アジアの日本から世界の日本へ）

1 考 察

(1) 教材観

本題材は、近代国家の建設をめざした明治政府が、国際的地位の向上をめざすことと、大陸との関係のあらましを日清・日露戦争、条約改正などから理解させるとともに、日本の産業革命が日清戦争前後から急速に発展し資本主義経済の基礎が固まっていたことを製糸・紡績業や鉄鋼業の発展などから理解させる題材である。また、産業革命による人々の生活の変化や近代文化が欧米文化を受容して著しく発展していったことに気づかせることもねらいとしている。

習指導要領では、内容の取り扱いで「産業革命」や「近代文化」については『…代表的な事例を取り上げて気づかせるようにし、網羅的な扱いにならないようにすること。』また、「国民生活の変化」については『…身近な地域を例として具体的に変化をとらえさせる。』としている。

また、平成16年度に実施した「群馬県教育課程実施状況調査」の報告書によると、今後の授業改善のポイントとして、近現代史の学習をするにあたっては地域の人的・物的な歴史的資料を積極的に活用し、生徒の身近な生活の中から歴史を具体的に理解させることが必要であると述べている。

そこで、本題材の中の「まゆと鉄がささえた日本の近代」において、生徒が子どもの頃から身近に接している「上毛かるた」の札の一枚である「桐生は日本の機（はた）どころ」をてがかりに研究主題、テーマにせまろうと考えた。「上毛かるた」は、昭和22年に財団法人群馬文化協会が制作した郷土カルタであり、発行部数は、現在まで約130万組で、地方カルタとしては全国第1位である。群馬県各地の歴史にかかわりのある人物や名所、特産物などを絵札としている。小学生や中学生ならばほとんどの子どもたちが体験しており、各地域ごとの練習会が実施され、地区予選大会を経て、2月には県大会まで行われるほど盛んであり、ほとんどの子どもたちが読み札を覚えているほど、定着している。

桐生市は江戸時代以降、繊維産業の中心地として栄え発展してきた。「西の西陣 東の桐生」といわれるほどの生産を誇り、海外への生糸の輸出も盛んであった。しかし、今現在、昔の面影が薄れてきたため、生徒は桐生市が、かつてこうした隆盛を誇っていたことを実感することは難しい状況になっている。

そこで、本題材では、生徒が小学生の頃から親しんできた「上毛かるた」の札「桐生は日本の機どころ」をてがかりに、桐生の産業革命の姿をとらえる学習活動を行い、その後、桐生の近代化に貢献した団体「桐生懇話会」（明治33年 1900年設立）に焦点を当て、桐生懇話会の推進した事業である桐生停車場（駅舎）の改築、桐生郵便局内の電話設置の推進、渡良瀬水力電気会社設立、繊維学校設立の提唱などの取組を通して、桐生の近代化が図られてきたことを様々な資料から多面的・多角的に考察していく。そこから生徒は、繊維産業の発展、すなわち「産業革命」と「近代化」が密接にかかわっていることに気付くであろう。また、改めて、身近な桐生市の繊維産業について調査し、学習することにより、日本の産業革命の一翼を担い、近

代化に向けてさまざまな取組を行ってきた桐生市の足跡は、そのままこの時期の日本の社会の縮図になっていることが理解できる題材であると考ええる。

さらに、身近にある様々な情報を活用し、歴史的事象の背景を探る、事象を歴史の流れの中に位置付ける、諸事実のつながりを関連的に理解する、現代とつなげて考える、などといった思考力を育てること、すなわち歴史的な見方や考え方を育てるためにも、地域教材を活用することは有効であると考ええる。

【社会的事象への関心・意欲・態度】

本題材では、日清・日露の戦争を通して、日本の近代産業の発展と、国民生活の変化、文化の大衆化が図られてきたことに関心を持ち、意欲的に追究させていくことをねらいとしている。通史では、なかなか実感がわかない産業の発展や文化の大衆化を身近な地域教材であり、生徒が誰でも知っている「上毛かるた」『桐生は日本の機どころ』を手がかりに仮説を立て、検証していくという課題解決的な学習を取り入れることで、意欲的な追究を行っていくことができる題材であると考ええる。

【社会的な思考・判断】

本題材のねらいでもある、我が国の近代産業の発展とそこでの国民生活の変化及び近代文化の形成と文化の大衆化を多面的・多角的に考察し、公正に判断できるようにするために身近な地域を例に取り上げ、仮説を立て、様々な資料を収集し、活用することで、歴史的事象の背景を探ったり、大きな歴史の中に位置付けたり、事象を関連づけて考えたりするなどの思考力を育てるのに適した題材であると考ええる。特に、桐生懇話会の活動が桐生市にもたらした「近代化」と繊維産業すなわち「産業革命」の中心地であった桐生市との関連を多面的・多角的に考察することは、歴史的な見方や考え方を育てるのに適した題材であると考ええる。

【資料活用の技能・表現】

身近な地域を題材にし、課題解決的な学習を行うことは、資料やグラフ・写真など様々な情報の収集が比較的容易になるであろう。また、桐生懇話会などの具体的な資料や繊維産業に関するグラフなどに接することで、これらを読み取り、分析する技能を高めながら歴史的事象の特色や関連性に気付いたり、それらをまとめたりする表現力を育成することができる題材であると考ええる。

【社会的事象についての知識・理解】

我が国の近代産業の発展とそこでの国民生活の変化を理解させるためには、身近な地域の桐生市から具体例をあげて理解させることが重要である。桐生市には、当時日本を代表する繊維産業の会社が数多くあり、そこで働く人々の様子や生活の変化を具体的な資料を通して知ることができる。また、足尾銅山の鉱毒事件も、具体的な被害がすぐ近くで発生しており、田中正造も桐生に来て講演しているという事実もある。さらに、近代文化の形成と文化の大衆化についても生徒になじみのある桐生市出身で講談社の創立者、野間清治がおり、生徒に親しみやすい題材となっている。

(2) 研究主題とのかかわり

◎全体研究主題「確かな学力を育てる社会科教育の展開」－基礎・基本を確実に身に付け、社会的な見方や考え方を育む授業の創造－とのかかわりについて

○本題材における「基礎・基本」とは

- ・身近な地域を扱うことにより高まる「学ぶ意欲」
- ・仮説を立てる、検証方法を考えるという「思考力・判断力」
- ・KJ法を活用する、仮説の検証体験をするという「学び方」
- ・検証体験を通して課題の追究を行うことで身に付く「課題解決能力」
- ・まとめや発表を通して身に付く「態度・技能・表現力・知識」

○本題材における「社会的な見方や考え方」とは

- ・桐生市における繊維産業の発展や近代化の取組を学習することで、日本の産業革命や近代化との関連

を多面的・多角的に考察することから、一般性、特殊性、因果関係をとらえるなどの思考操作活動を行うこと。

・桐生市の繊維産業の推移を学習することを通して、現在や将来の桐生市について考えること。

◎分野別研究主題「様々な情報を活用して、歴史的な見方や考え方を育てる指導の工夫」とのかかわりについて

本研究で歴史的分野の研究主題にせまるための指導内容として重視する点は以下の3点である。

(ア) 各種の資料から必要な情報を読み取ることができるようにすること。

(イ) 歴史的事象を多面的・多角的にとらえることができるようにすること。

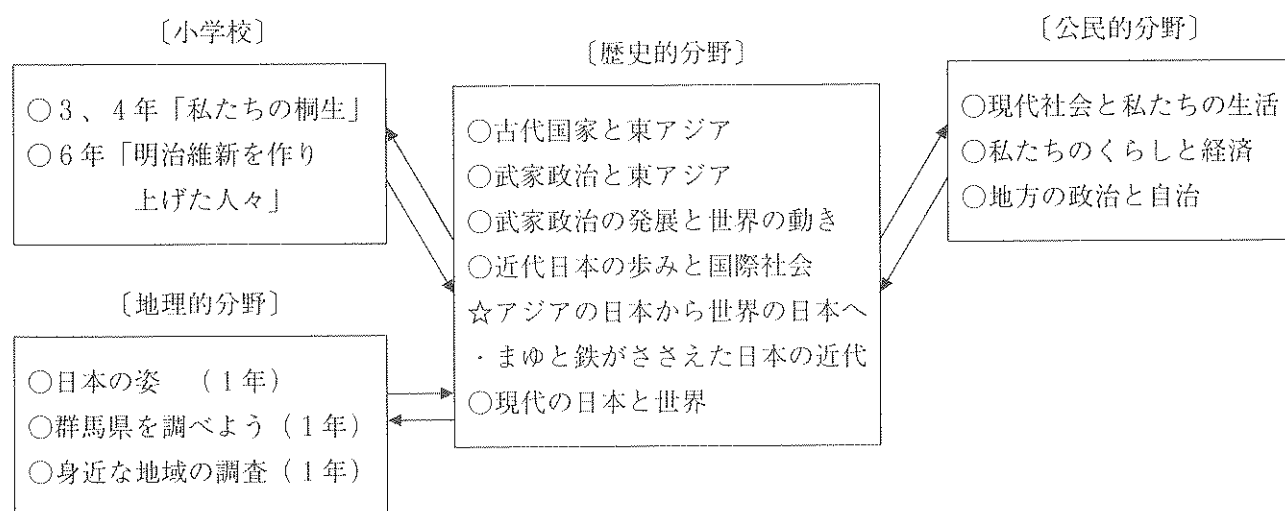
(ウ) 歴史的事象について、調べたり発表したりできること。

本題材では通史を学んだ後に、身近な地域教材を扱い、課題解決的な学習を取り入れた。地域カルタである「上毛かるた」の「桐生は日本の機どころ」を証明するための仮説を立て、資料の収集、読み取りを行い、様々な情報を活用することで、歴史的事象を文化面や経済面、社会面など様々な側面から考察する多面的なとらえ方や、地域や立場、身分、職業の違いなどから考察する多角的なとらえ方ができるように学習過程を構成した。

また、調べたことを、個人または小グループで検討したり、KJ法などを応用し、情報を共有化したりする中で、歴史的な見方や考え方を深めさせていく。

さらに、まとめの段階で複数の資料を関連づけて多面的・多角的に考察し、資料を基に因果関係をとらえ、根拠や理由を明らかにして発表する学習活動を設定した。それは、自分が追究してきたことに根拠や理由を明らかにして発表したり、説明したりすることが、個人だけではなく、全体に伝え合う、すなわち「学びの共有化」につながるからである。また、歴史的な見方や考え方を深めるためにはこうした学習活動が重要であると考ええる。

(3) 題材の系統



(4) 生徒の実態

【社会的事象への関心・意欲・態度】からみた生徒の実態

本学級の生徒の社会科に対する取組は、まじめで熱心であるが、特に、自分の考えや意見を積極的に発表しようとする意欲や態度が十分身に付いていないという実態がある。また、アンケート調査からは、桐生が繊維産業がさかんであった事実を具体的に知っているものはほとんどいないことや、現在の桐生市について肯定的な回答があまりみられず、自分の住んでいる町の過去や現在、将来に関心をあまり持っていないとい

う実態が明らかになった。

【社会的な思考・判断】からみた生徒の実態

教育課程実施状況調査やCRT学力検査の結果からみると、思考力・判断力などが十分に達成されていないという結果が出ている。事前のアンケート調査からも桐生市が「日本の機どころ」であった根拠を「生産量」といった一面だけでとらえている生徒が大部分であった。歴史的事象を多面的にとらえたり、多角的に考察したりする学習体験が不足していることが影響していると思われる。

課題解決的な学習については、地理的分野の「身近な地域調べ」や「山形県」の調べ学習等で行い、まとめとしてポスターセッションの経験はあるが、豊富な経験とはいえない。他人の意見や発表を参考に歴史的な見方や考え方を深める「学びの共有化」が大切になってくるものと考ええる。

【資料活用の技能・表現】からみた生徒の実態

教育課程実施状況調査やCRT学力検査の結果から、資料活用の技能や表現が十分に達成されていないという結果が出ている。

具体的には、自分で仮説を立てて、検証していこうとする際に、どのような情報が必要であり、どのような方法で検証するのかといった力を身に付けさせることが大切であると考ええる。また、学力検査などの結果をみると、複数の資料を関連づけて考察したり、因果関係をとらえる学習活動が不足しているという実態もある。

【社会的事象についての知識・理解】からみた生徒の実態

本題材における事前調査（男子8名、女子14名 計22名）を実施した。

① 上毛かるた「桐生は日本の機どころ」の札を知っていますか。

はい 22名 いいえ 0名

② 「桐生は日本の機どころ」はいつごろのことだと思いますか。

江戸時代 1名 明治時代以降 9名 大正時代以降 6名
昭和時代（戦前）3名 昭和時代（戦後）3名

③ 桐生は日本の機どころというのは具体的にどういう状況をいったのでしょうか。

- ・生産や技術が日本一であった。 ・桐生は織物で有名であった。
- ・きれいな織物をたくさん生産し、海外に輸出していた。
- ・機織りの官営工場が多かった。 ・質の良いものをたくさんつくっていた。

④ 当時の桐生の町はどんな様子だったと思いますか。

- ・織物工場がたくさんあった。 ・毎日織物をやっていた。
- ・自然が豊かだった。 ・「着物」や「帯」を身につけている人がたくさんいた。
- ・交通が発達していた。 ・服の種類がたくさんあった。
- ・町がすべて織物と関係していた。
- ・きれいなところだった。 ・企業同士の競争があったのではないかな。
- ・織物などを売る商店街が発達し、多くの観光客もたくさんいた。
- ・活気にあふれて町全体が織物産業をしていた。
- ・人がたくさんいて都会の方だった。 ・他の町より工業化が進んでいた。

⑤ 「桐生懇話会」「桐生倶楽部」という団体を名前だけでも知っていますか。

「桐生懇話会」 知っている 0名 知らない 22名
「桐生倶楽部」 知っている 4名 知らない 18名

⑥ 桐生は、現在でも「日本の機どころ」だと思いますか。また、そう思う理由は何ですか。

- | | | |
|------|-----|---|
| 思う | 3名 | ・上毛かるたで今でもいっているから
・今でも、織物会館などあり、展示公開しているから。
・工場がまだ残っているから。 |
| 思わない | 19名 | ・やっている人も少ないし、その時代は終わっていると思う。
・何もいいものを生産していないから。
・織物工場がどんどん減っているから。
・織物を職業にしている人も少ないし、あまりにぎやかじゃないから。
・織物をつくっているところをほとんど見ないから。
・京都の方が織物は有名だから。 |

アンケート調査から、生徒がかつて桐生が「日本の機どころ」であったことは理解できていることがわかった。しかし、いつ頃のことなのかについては正確には理解できていない。また、「機どころ」の状況については、ほとんどの生徒が「生産量が多かった」という一つの側面だけを考えており、多面的なとらえができていない生徒はほとんどいない。中には「生産力と技術力」「きれいな織物をたくさん生産し海外に輸出していた」といった複数の側面をあげる生徒もいた。

さらに、当時の桐生についても、「織物の町で活気があった」という生徒が大部分であったが、「観光客が多い」「商店街が発達」「交通が発展」などといった多面的にとらえることができる生徒もいた。

一方、「桐生懇話会」「桐生倶楽部」については、ほとんどの生徒が知らないが、「桐生倶楽部」については現在でも、建物が残り、活動も行っているため、名前だけは知っている生徒が4名いた。しかし、これらの団体が近代化に果たした具体的な役割や活動についてはほとんどの生徒が知らない。生徒は桐生市について「機どころ」であるという認識はあるものの、いつごろのどういう状況をいつのかについては、十分理解できていない。また、現在の桐生については、「桐生は日本の機どころ」を否定的に見る意見が多かった。人口の減少、織物工場の減少、生徒数の減少、合併問題などさまざまな要素が影響しているものと思われる。

2 目標

急速に近代化を進めた日本の国際的な地位の向上と大陸との関係について、日清・日露戦争、条約改正を通して理解するとともに、近代産業が産業革命を経て発展し、国民生活が変化していったことを様々な資料を活用し、多面的・多角的に考察することで歴史的な見方や考え方を養う。

3 評価規準

◎……十分満足できる状況

○……おおむね満足できる状況

◎日清・日露戦争が当時の日本人の中国や朝鮮、欧米の人々に対する意識にどのように影響したかに関心を持って意欲的に調べるとともに在日韓国・朝鮮人問題に関心を持ち、侵略や差別を許さない態度を持つとしている。(関心・意欲・態度)

○日清・日露戦争が、当時の日本人の中国や朝鮮、欧米の人々に対する意識にどのように影響したかに関心を持って調べようとしている。(関心・意欲・態度)

◎日清・日露戦争と条約改正を経て、日本が近代産業が産業革命を発展させ、東アジアにおける「帝国」となっていったことを、具体的な資料や事例に基づいて多面的・多角的に考察し、説明できる。

(思考・判断)

○日清・日露戦争と条約改正を経て、近代産業が産業革命をさせ、日本が東アジアにおける帝国となっていったことを欧米列強の動きと関連づけて説明できる。(思考・判断)

◎教科書の地図と風刺画を活用して、日本や欧米諸国による中国分割の様子や韓国の植民地化の様子を指摘できる。または、日本の韓国の植民地化の様子を指摘できる。(技能・表現)

○教科書の地図を活用して日本や欧米諸国による中国分割の様子、または日本の韓国の植民地化の様子を指摘できる。(技能・表現)

◎大陸をめぐる当時の国際状況を背景に日清・日露戦争の原因と経過、そして、2つの戦争と条約の改正を経て、日本が東アジアにおける帝国になっていったことや韓国の植民地化の様子を理解している。

(知識・理解)

○大陸をめぐる当時の国際状況を背景に日清・日露戦争の原因と経過、条約改正を経て、韓国を植民地化したことを理解している。(知識・理解)

4 指導方針

◎「様々な情報の活用」に関して

○生徒が仮説の検証するために必要な様々な統計資料や歴史資料を収集していくことと同時に、教師側も資料を用意しておき、生徒が様々な資料を組み合わせたり、選択したりして検証できるようにする。

○資料や歴史的な事象を多面的・多角的にとらえることができるように、立場の違いからとらえさせたり、共通性(一般性)や特殊性などをあげさせたりしながら比較・検討していく。

○資料の収集については一定の期間をおき、校外の施設や教育資料室などとの連携を図りながら実施させる。また、こうした施設の方からのアドバイスをもらえるように連絡・調整する

◎「歴史的な見方や考え方を育てる」に関して

○身近な地域教材を取り上げ、生徒が課題に対する仮説を立て、様々な資料を活用しながら多面的・多角的に考察し、まとめるという課題解決的な学習を取り入れることで、歴史的な見方や考え方を育てていく。

○個別学習や小集団での学習、一斉学習など学習形態を工夫し、話し合い活動や意見の発表や情報の共有化を図る活動を通して、社会科の基礎・基本や歴史的な見方や考え方を深めさせていく。

○ブレインストーミング法やKJ法を応用することで、生徒が自由に考えを発表したり、まとめたりできるようにさせる。

◎「題材の取り扱い」に関して

○通史を学んでから身近な地域教材を取り上げることで、生徒の「学ぶ意欲」を高めていく。

○社会生活の変化や近代文化については、織物工場で働く人々の生活、足尾銅山の公害問題、講談社の創立者野間清治など、身近な事例を中心に扱い、網羅的な学習に陥らないようにする。

○現在の桐生市の状況との比較や、桐生市の将来にも触れることで、身近な地域に対する関心を高めさせ、「桐生を好きな子」を育てる。

5 指導と評価の計画(10時間予定)

	学 習 活 動	支援及び留意点	評価項目・評価方法
第1時	◎日清・日露戦争とアジア ○朝鮮をめぐる日本と清国との対立と朝鮮半島の国内の様子を理解する。 ○中国をめぐる欧米諸国の侵略と日本の役割を理解する。 ○日本とロシアの対立、戦争に対する国内の反応、講和条約の内容に	○風刺画を通して当時日本の立場が大きく変化していったことを理解させる。 ○条約改正は長年にわたる外交上の課題として取り組まれ、近代国家の形成や日清・日露戦争の勝利とともに対等条約の樹立に	○日清・日露戦争、条約改正を経て、日本が東アジアの帝国になっていったが理解できる。 (知識・理解) 【ワークシート・ノート・定期テスト】

	について理解する。	尽くした人々の努力に気付かせる。	
第2時	◎アジアの国々の動き ○日清・日露戦争によって勢力を得た日本が、台湾・韓国を植民地化したことを当時の国際情勢とともにとらえる。	○ネルーや安重根を例に外国からみた日本の姿を通じて、日本の植民地化により中国や朝鮮において日本の帝国主義に対する抵抗運動が強まっていったことに気付かせる。	○日本による韓国の植民地化の過程と民衆の抵抗を具体的な資料や事例に基づいて説明できる。 (思考力・判断力) 【観察・ワークシート】
第3時	◎まゆと鉄がささえた日本の近代 ○製糸・紡績と製鉄を例に、日清戦争前後から日本の技術が飛躍的に発展し、資本主義経済の基礎が固まったことを理解する。	○日本の近代産業は政府の富国強兵、殖産興業政策のもとで進展した経緯があったことを理解させる。	○製糸や紡績・製鉄を例に日本の資本主義の基礎が固まったことを理解できる。 (知識・理解) 【ワークシート・定期テスト】
第4時	【課題の把握】 【仮説の設定】 「桐生は日本の機どころ」を証明するための仮説を考え、まとめる。 (ブレインストーミング法やKJ法の応用)	○ブレインストーミング法や・KJ法を活用し、生徒が自由に意見を出し合い、仮説を立てやすいようにする。 ○一斉の学習→個別の学習→少人数の学習と学習形態を工夫し、互いに情報を共有する中で歴史的な見方や考え方を深めさせる。	○仮説を3つ以上立てることができる。 (思考力・判断力) 【ワークシート・発表】 ○仮説について根拠や理由をあげて説明できる。 (技能・表現) 【ワークシート・発表】
第5時	【仮説の検証方法の検討】 【資料の収集】 (週末の利用など一定の期間をとる)	○インターネット、図書館、織物参考館、教育資料室などさまざまな機器や施設を利用し資料の収集を行う。 ○必要な資料は何かを考えられない生徒には個別に助言をしていく。 ○教師側が必要な資料を収集しておき、必要に応じて提示していく。	○適切な資料を収集・選択できる。 (資料活用の技能・表現) 【ワークシート】
第6・7時	【課題の追究】 資料の分析・検討・比較 【課題のまとめ】 ワークシートにまとめる	○資料を多角的・多面的に比較・検討・考察することで仮説を検証し、「日本の産業革命」の縮図ともいえる繊維産業の中心地であった桐生の姿を理解させる。	○資料を多面的・多角的に比較・検討・考察することで仮説の証明ができる。 (思考力・判断力) 【ワークシート】
第8時 【本時】	【課題の把握】 【課題の追究】 資料の比較・検討・考察	○「鉄道」「電気」「電話」「学校」の4つの項目の「近代化の比較表」をもとに、日本のなかでも比較的早く近代化が進んできた	○桐生の近代化と日本の近代化の比較表からわかったことを書き出すことができる。

第 8 時 【本 時】	【課題のまとめ・発表】	桐生の姿を理解させる。 ○「桐生懇話会」が桐生の近代化に果たした役割とその背景について具体的な資料を基に多面的・多角的に考察させ、桐生の「近代化」と「産業革命」は、当時の日本の縮図となっており、両者が密接に関わっていたことに気付かせる。	(資料活用の技能・表現) 【ワークシート・発表】 ○懇話会の事業が産業革命と密接に結びついていることを根拠をあげて説明できる。 (思考力・判断力) 【ワークシート・発表】
第 9 時	◎「一等国」の光と影 ○日本の近代化により農村の生活の変化や労働問題、社会問題が発生したことに気付く。	○教科書の資料だけではなく、桐生市における労働問題や足尾の鉍毒事件などを例に具体的な変化をとらえさせる。 ○近代化と産業革命の多角的なとらえの一つとして押さえる。	○資料を活用して、現在の自分の生活との違いや問題点を指摘できる。 (資料活用・技能・表現) 【ワークシート・観察】
第 10 時	◎明治の文化 ○近代文化を受容して学問・科学技術の進歩が著しかったことや伝統的な文化の上に欧米文化を受容して形成されたものであることに気付く。	○講談社を創立した桐生市出身の野間清治など代表的な事例を取り上げ、網羅的な取り扱いにならないように留意する。	○具体的な事例を例にこのころの学問や科学の発達について伝統的な文化の上に成り立っていたことが理解できる。 (知識・理解) 【ワークシート・観察】

Ⅱ 本時の学習指導

1 目 標：桐生市の近代化に貢献した「桐生懇話会」の事業を近代化と産業革命とのかかわりを多面的・多角的に考察する中で、歴史的な見方や考え方を養う。

2 準 備：教科書（帝国書院「中学生の歴史」）、ノート、資料集、ワークシート、資料
「ふるさと桐生のあゆみ」（桐生市教育委員会）、プロジェクター

3 展 開

ねらい（時間）	生徒の活動	支援及び留意点・評価項目〔方法〕
○資料から日本と桐生の近代化を比較させる。（10分）	○日本の桐生の近代化の比較表から気づいたことをあげてみる。 ○桐生が日本の中でも比較的早く近代化が進んだことに気付く。	○「近代化の比較表」から気づいたことをワークシートに記入させ、発表させる。必要に応じて、他の地域の事例や資料をあげるなどして桐生市の近代化が比較的早く進んできたことを補足する。 【資】近代化の比較表から気づいたことを複数あげることができる。〔ワークシート・発表〕
○桐生懇話会について資料をもとに理解させる。（8分）	○桐生の近代化に力を尽くした「桐生懇話会」について資料を基に理解する。	○桐生懇話会が織物業者を中心に構成され、桐生の織物の発展と桐生の近代化のために貢献してきたことを理解させる。 〔資料〕「ふるさと桐生のあゆみ」より ・設立と中心人物について ・桐生懇話会の職業別・地域別会員数の表 ・設立の中心となった人物が設立した学校や銀行について（森宗作など） ・実施したおもな事業一覧 ・懇話会が行った講演会（講師 洪沢 栄一）
○桐生懇話会の活動について近代化と産業革命の両面からかかわりを考察させる。（10分）	○懇話会の推進した近代化事業が、産業革命とどのようにかかわっているのかを、資料やこれまでの学習の成果を基に多面的・多角的に考察し、発表する。	○懇話会が推進した事業が桐生の近代化を進める大きな原動力になったことばかりでなく繊維業の発展（産業革命）と深く関わっていたことを、これまで調べてきた様々な情報や資料を基に多面的・多角的に考察させる。 ○個人の考えを基に行うが、状況に応じて、小グループによる意見交換や話し合いをさせる。
○考察したことを発表させる。（15分）	○考察したことを発表する。 ○参考になった友達の意見をワークシートに書く。	○多面的・多角的なとらえ方が深まらない生徒には、教師がヒントになるような視点を助言するなどの支援を行う。 ○根拠や理由をあげて発表できるようにアドバイスしていく。 ○参考になった友達の意見をワークシートに記入することで、多面的・多角的なとらえ方がより深まるようにさせる。
○教師の説明を聞き、近代化と産業革命とのかかわりを客観的にとらえさせる。（5分）	○それぞれの事業について教師に説明を聞き、自分の考察した内容と比較してみる。	○生徒たちが考察したことを認めながらも、資料「ふるさと桐生のあゆみ」などから歴史的な事実を客観的にとらえさせるようにする。 【思】懇話会の事業が産業革命と密接に結びついていることを、資料を基に多面的・多角的に考察し、根拠や理由をあげて発表することができる。〔ワークシート・発表〕
○次回の授業の予告	○授業の予告を聞き、次の学習への意欲を持つ。	

〔2年 社会科〕 ワークシート 「まゆと鉄がささえた日本の近代」 No.2	番 氏名
--	-------------

〔資料Ⅰ〕 日本と桐生の近代化の比較

項目	日 本	桐 生	他の地域・都市
鉄道	1872年 新橋－横浜間開通 1874年 大阪－神戸間開通 1889年 <u>東京－京都間開通</u>	1884年 <u>上野－前橋間で開通</u> 1888年 <u>小山－高崎間（両毛線）開通</u> <u>桐生に鉄道が走る</u> 1912年 足尾線（桐生－間藤）開通 1922年 上毛電鉄（西桐生－中央前橋）開通	1889年 <u>四国地方で開通</u> <u>九州地方で開通</u> 1891年 <u>上野－青森間で開通</u>
電話	1890年 日本で初めて電話が東京で開通	1907年 <u>桐生で電話開通</u> 開設当時は 111軒	1907年 茨城県で電話開通
電気	1887年 東京電灯会社が電気を供給	1892年 <u>日本織物が水力発電による電灯点火</u> 1894年 <u>桐生電灯合資会社により、電気供給（群馬県で初）</u> 1906年 渡良瀬水力電気会社設立	1888年 大阪、京都、神戸で電灯点火
学校	1872年 <u>学制発布</u> 全国に小学校が設立される	1873年 <u>浄運寺に「桐生学舎」ができる。「広教舎」（広沢）「新宿学校」</u> 1874年 「安楽土学校」（西、東） 「境野学校」「天王宿学校」 などがつくられる。 1896年 桐生町立織物学校開校	

1. 資料Ⅰの _____ や他の地域や都市との比較から、桐生の近代化について気がついたことを書いてみよう。

・ ・

2.「桐生懇話会」が行った桐生の近代化事業は、日本の産業革命（特に繊維産業）の発展に深くかかわっていたとすれば、どんな点でかかわっていたと思いますか。理由を含めてあなたの考えを書いてみよう。

(1) 桐生停車場（現 桐生駅）の改築・・・織物業の発展と駅の改築にはどんなかわりあいがあるのだろうか？

あなたの考え

参考になった友達の意見

(2) 電話の設置・・・織物業の発展と電話の設置にはどんなかわりあいがあるのだろうか？

あなたの考え

参考になった友達の意見

(3) 渡良瀬水力電気会社の設立・・・織物業の発展と電気会社の設立にはどんなかわりあいがあるのだろうか？

あなたの考え

参考になった友達の意見

○桐生懇話会の設立（「ふるさと桐生のあゆみ」より抜粋）

1900年、株式会社「四十銀行」の総支配人秋田宗四郎は、頭取の森宗作、専務の大沢福太郎に、銀行業務の発展にとって、桐生町有志と銀行が密接な関係を持つことが必要であるとして、地方有力者を集めた会員組織の団体を結成することを提案した。生糸の買次商の中心的存在であった書上文左衛門を発起人に加えて「桐生懇話会」が発足した。

桐生町議会の議員の定数30名のうち常時、10名前後の者が懇話会員であったので、懇話会の意向が町議会に与える影響は大きかった。

懇話会の会費は月に1円（現在の1万円くらいか？）で月に1回定期的に会合を開いた。会の目的は「会員相互の親和」と「実業上健全なる発達」のためとしている。

1920年、発展的解消し、社団法人「桐生倶楽部」に引き継がれ現在に至っている。



〔社団法人 桐生倶楽部の建物〕

○桐生懇話会の職業別・地域別会員数

	織物業	糸 商	買次商	織 物 整 練	呉服・乾 物・質屋	銀 行 会社員	官 吏 教 員	合 計
桐生町	8	6	4	1	4	4	5	32
境野村	2		1					3
川内村	1							1
広沢村	1							1
梅田村	1							1
相生村		1						1
福岡村	1							1
合 計	14	7	5	1	4	4	5	40

○「桐生懇話会」の推進した事業

- ① 桐生町と桐生織物の宣伝
- ② 桐生停車場（桐生駅）の改築の推進
- ③ 桐生郵便局内の電話設置の推進
- ④ 渡良瀬水力電気会社設立の提唱・調査
- ⑤ 講演会の実施………当時の日本経済界の大物「渋沢栄一」（「日本銀行」の創立者）を桐生に呼び、講演会を実施する。

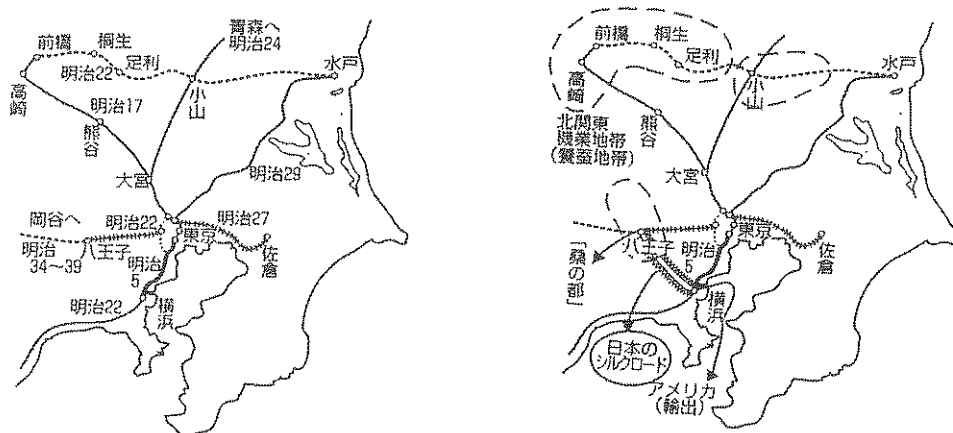
○桐生の近代化に貢献した「森 宗作」

足利市に生まれ、21歳の時に森宗五郎に養子として迎えられ、桐生に移り住んだ、織物業や買継商だけではなく、金貸業、糸商、銀行も経営し、財産を蓄積し、桐生第一の富豪となった。このような事業を背景に桐生の近代化に貢献し、渡良瀬水力電気会社の設立、桐生燃糸会社、桐生機械製作所、両毛整織会社、足尾鉄道会社の創立に尽くした。また、教育・文化面では、郡立高等女学校（現 桐生女子高校）、桐生織物学校、桐生織物染織学校（現 群馬大学工学部）、桐生中学校（現 桐生高等学校）、桐生が岡公園の創立に寄与した。

○桐生市に設置された電話（明治40年 当時111件）のおもな繊維業関係者

番号	氏 名	番号	氏 名	番号	氏 名
1	森 宗作	12	佐々木伝吉	41	高木商店
2	常見喜太郎	18	桐生撚糸合資会社	48	石井 濤吉
3	大沢福太郎	20	福田 常吉	53	彦部善四郎
4	書上文左衛門	21	神山芳次郎	59	株式会社小野里商店
6	金子竹太郎	22	飯塚春太郎	65	両毛整織株式合資会社
7	前原悠一郎	29	桑原 文作	67	境野源八郎
11	桐生織物株式会社	32	森合資会社	70	桐生局
		40	株式会社四十銀行	108	江原 貞助

◎明治初期の鉄道の発展



◎日本の鉄道の歴史（インターネットより検索）

1881年（明治14年）8月 日本初の私鉄として日本鉄道が創業。当初、鉄道頭の井上勝などは鉄道の原則国有を主張していたが、西南戦争などによって政府の財政が窮乏してしまったため、この頃までに開通していた鉄道は新橋駅～横浜駅間の他は、北海道の幌内鉄道（後、手宮線・函館本線の一部・幌内線）や大津駅～神戸駅間などにとどまり、これでは延々として鉄道整備など進まない事が予想されたことから私有資本を用いての鉄道建設を望む声が強くなっていき、結局政府の保護を受けた半官半民の会社として「日本鉄道」が創立された。

日本鉄道はまず東京都！東京からカイク！養蚕地の群馬県へ向かう鉄道路線より建設をはじめ、1883年（明治16年）7月28日に初の路線である上野駅～熊谷駅間を開業させた後、1884年（明治17年）8月20日に前橋駅まで延長、更に1891年（明治24年）9月1日には現在の東北本線にあたる上野駅～大宮駅（埼玉県）！大宮駅～仙台駅～青森駅間を開業させるなど、短期間で急速に路線を延ばしていく事になった。

日本鉄道の営業成績は政府の保護を受けたこともあってよかったため、以後山陽鉄道・九州鉄道など幹線の整備を行う私鉄会社が同じ様な方式で次々と誕生する事になる。この動きは、1890年頃に一旦沈静化するが、その後、中規模から小規模の路線を運営する会社が設立されるようになり、1906年（明治39年）の鉄道国有法公布までその流れは続いた。

◎日本の水力発電の歴史（インターネットより検索）

年月日	発電所名 イベント	当時の 出力kW	当時所有	所有	都道府県	備 考
明治21 1888／7／1	三居沢発電所 運用開始	5	宮城紡績	東北 電力	宮城県	記録に残る中では日本初の 水力発電直流発電
明治22						
明治23 1890／4	下野麻紡績発電所 運用開始	116.25	下野麻紡績	廃止	栃木県	出力は水車の出力（2基分） 初の交流水力発電
1890／12	間藤発電所 運用開始	300	古河	廃止	栃木県	トルビン式横水車
明治24 1891／11	日本織物発電所 運用開始	126	日本織物	廃止	群馬県	出力は水車の出力、初の超 低落差型 昭和22（1947）年に使用

◎桐生市の歴史（明治～大正）

- 1871（明治4）群馬県管轄となる。
- 1871（明治5）東毛3郡を群馬県より栃木県へ移管。
- 1873（明治6）今泉、本宿、堤、村松村が合併して安楽土村となる。
- 1876（明治9）東毛3郡が再び群馬県管轄となる。
- 1877（明治10）森山芳平らジャガード機を購入する。
- 1878（明治11）桐生会社（桐生織物同業組合）設立。山田郡役所設置。
- 1879（明治12）第四十銀行（勸業銀行前身）桐生支店設置。
- 1882（明治15）関東東北の7県連合繭・生糸・織物共進会が桐生新町にて開催。桐生地方はコレラ流行。
- 1884（明治17）桐生新町、新宿村、境野村、広沢村、上久方村、山田村、下新田村に戸長役場を置く。この頃より羽二重が注目すべき輸出織物となる。
- 1886（明治19）佐羽喜六が欧米に旅行し、外国製ジャガードを購入して帰国する。成愛社において蒸気力を応用し整理機械を運転。
- 1889（明治22）桐生新町、安楽土村、新宿村、下久方村、上久方村の平井が併合し、桐生町となる。両毛線開通。
- 1894（明治27）日清戦争はじまる。桐生町に電灯点灯。
- 1896（明治29）桐生織物学校開校。
- 1897（明治30）足尾銅山の鉍毒排除を帝国議会へ請願。
- 1902（明治35）東宮殿下（後の大正天皇）が桐生町に行啓。赤岩橋開通。
- 1904（明治37）日露戦争はじまる。
- 1907（明治40）桐生町に電話開通。
- 1911（明治44）足尾鉄道（桐生～大間々間）開通。相老駅新設。
- 1913（大正2）東武鉄道太田～相老間開通。新桐生駅新設。
- 1914（大正3）第一次世界大戦に日本が参戦。
- 1916（大正5）桐生高等染織学校（群大工学部）開校。
- 1919（大正8）桐生倶楽部創立。
- 1921（大正10）市制施行。前原良太郎市長就任。
- 1925（大正14）鋼鉄ワーレントラス構造の錦桜橋開通。